

江戸期～明治期洋画の基礎的資料の考察

光学調査による、明治期油画の描画表現と修復

はじめに

弊社では、さまざまなコレクションの調査をおこなっているが、折に触れて江戸期～明治期等の洋画の基礎的な調査をおこなっている。今回は前回に続き、住友資料館において、黒田清輝が描いた油画と伝えられている静物画「アネモネ」より基礎的な資料を採取し観察をおこない、地塗り層、絵具層に見られる描画方法を考察した。

当該作品では、有色の予備的な地塗り層はなく、白色の地塗りに直接描画されていた。明るい画地を活かした印象派、または我が国でも明治時代、後半以降、近代に向かってよく観られる描画の手順でもある。本文では、絵具の試料による断層観察や光学調査の結果を発表する。

1. 黒田清輝作「アネモネ」の仕様・状態・修復

支持体： 亜麻布、平織。織り系数は1センチあたり平均縦9本横10本、画面の寸法は天地56.1cm左右46.1cm、木枠の厚さは1.7cmである。鉄製のタックスで、天地方向の木枠が2本、水平方向の木枠が2本、水平方向の中棧が1本の合計5本から構成された木枠に張られている。

地塗り層： 白色で油性、鉛白を含む。(蛍光X線分光分析による)

絵具層： 描画の絵具に使用されている白色は鉛白を含んでいる。

署名年紀： 画面左下方に褐色系の絵具で記されている。

ワニス層： 天然樹脂系のワニス塗布されている。ワニスは酸化し、黄化している。

状態の概要： 作品は麻布の酸化が進行し、やや脆化している。カンバスの張りは緩み、画面には木枠擦れも発生している。タックスは酸化し錆び付いている。画面上部には布地の裂けが2箇所ある。裂けた部分には、布製のパッチがあり、画面には加筆されている。加筆は画面の数カ所に及び、絵具の剥落している箇所等に特におこなわれている。天然樹脂系のワニス黄化し、塵埃の付着とともに画面の色調が著しく歪んでいる。

今回の修復の方針：酸化、脆化し、裂けたカンバスを補強するために裏打ちした。

裏打ちは Beva フィルムを用いた方法でおこなった。

画面は洗浄をおこない、ワニスを取り除き、さらに古い補彩を除去した。

2. 「アネモネ」肉眼観察と光学調査、試料観察による技法および状態の調査

今回の調査では、自然光下での肉眼による観察に加え、側光線、紫外線、赤外線、X線等の不可視放射による観察もおこない状態や技法を観察した。採取した試料による断層観察(クロスセクション)もおこなった。当該作品では部屋の片隅の窓辺に置かれた静物に右方の窓から入る光源を利用し、モチーフに光の濃淡を与えている。X線の観察では、光の当たっている箇所の表現には、白色の鉛白を含んだ絵具を厚塗りしており、光の量によって絵具の量を調節し、概ねその秩序に支配された画面を構築している。これは白黒写真に現れる諧調を観てもあきらかである。花瓶の表現では、解き油を十分に含んだ油絵具により厚塗りしている。特に陶器でできた装飾を分厚い絵具で表現している。陰影部分は明るく表現された箇所に比して、やや薄塗りである。クロスセクションの観察では、地塗り層に予備的な有色層などはなく、白色の地塗りに直接、モチーフ固有の色を彩色している。印象派や明治後半以降の近代絵画の表現にも比較的よく観られる手順であり予備的な地塗り等に影響されないで表現する描画の様子がわかる。紫外線蛍光写真では紫外線を吸収した箇所が薄黒く映り、過去に加筆された跡が明らかになっている。

3. 調査結果のまとめ

今回の静物画の観察調査では、室内の窓から入る柔らかい光源を利用し光の移り変わりを基調として構築した明るい画面を観る事が出来た。それには有色や褐色の地塗りは存在せず、明るい画地を活かした近代絵画にも観られる表現であるといえる。多くは修復されている事が多いこの時代の作品であるが、当該作品においても、かなりの過剰な補彩を確認した。弊社では、今後も修復によって原画に近い状態に処置し、初期の日本洋画の調査を続ける方針である。

住友資料館所蔵 黒田清輝作「アネモネ」

基礎資料図版



修復後ノーマル写真

Tokyo Conservation



近接写真／修復前



ノーマル写真／修復前



側光線写真



紫外線蛍光写真



白黒写真／修復前



赤外線写真／修復前



X線写真／修復前

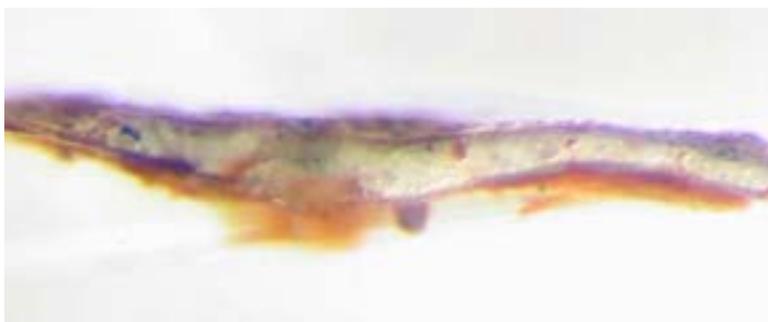
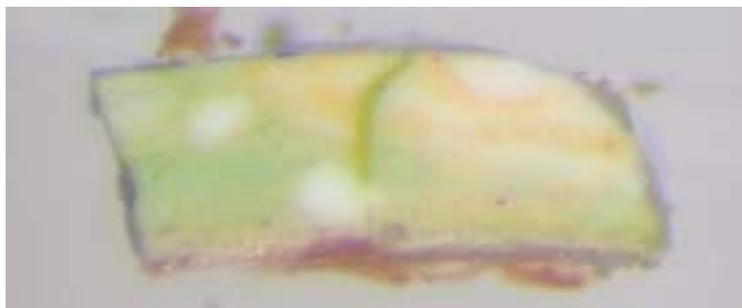


裏面

クロスセクションの観察



クロスセクション採取分布図

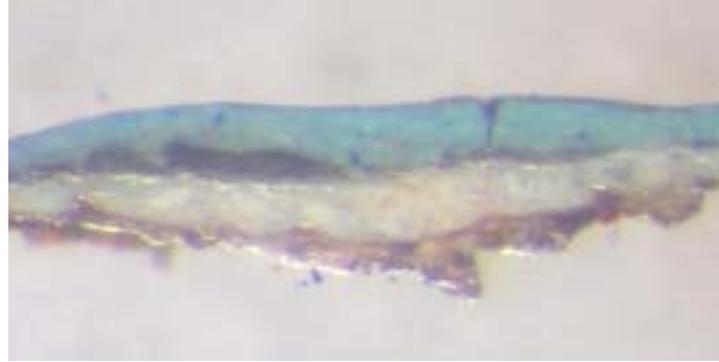


Tokyo Conservation

試料 1 : 花の茎 × 5 0



試料 2 : 背景 a × 5 0



試料 3 : 背景 b × 5 0

試料 4 : テーブル × 5 0